

# 神託が降りまして、 今日から神の愛し子 です!

## 2

最強チート承りました。

では、我慢はいたしません!

著 しののめあき





ブライアン

専属護衛騎士の一人。リーゼロッテの侍女。



アンナ

クリスティア・フォン・ローゼバルト

ローゼバルト公爵夫人。  
家族を優しく見守る  
穏やかな母。



レオンハルト

第三王子で、  
リーゼロッテの同級生。  
二人の兄に引け目を感じている。

マライア・カイエン

カイエン伯爵家の一人娘。  
リーゼロッテの同級生。  
変わった特技を持つ。



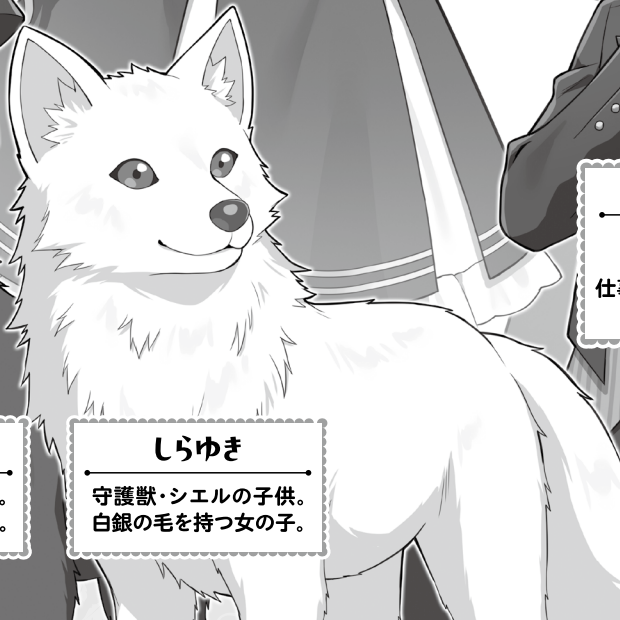
リアム・フォン・ローゼバルト

ローゼバルト公爵家の  
当主で王国の宰相。  
仕事も見た目も完璧な父。



くろがね

守護獣・シエルの子供。  
漆黒の毛を持つ男の子。



しらゆき

守護獣・シエルの子供。  
白銀の毛を持つ女の子。



セシル

リーゼロッテの  
専属執事。  
仕事はそつなくこなすが、  
たまに毒舌。



リーゼロッテ・フォン・ローゼバルト

公爵家の末娘で、  
前世の名前は楠木あかり。  
転生時に愛し子として  
チート魔法を授かる。

## 王都帰還

私、リーゼロッテ・フォン・ローゼバルトは、花も恥じらう十五歳。

本来、楠木あかりという名で日本人として生を受け暮らしていた。

それが、神様の手違い（いや、あれは不幸な事故）により、よりもよって結婚式当日に魂が身体から放り出されてしまった。

神様からは謝罪も頂き、ご丁寧に加護付きでこの異世界に転生させてもらった。

この世界で加護を受けた愛し子、リーゼロッテとして生まれた私は、神様から定められた通り、三歳の誕生日に前世の日本人としての記憶が覚醒した。

神様は過保護だったのか、もしくは前代未聞の事故に対する罪悪感からなのか、神託という形でこの世界に干渉し、私に悪意を持つだけで神罰が下る【神のゆりかご】という加護を与えて私を守ってくれたのだが……

なんせ、前世の人格が慎重派でも控えめでもなかった。

自分で出来ることならやってしまおう、やらないで後悔するよりやってから後悔すべき。それが

私の信条だった。

ここはよくある転生小説のように、決まったシナリオが存在する世界ではなく、むしろ神様から楽しく自由に過ごして天寿を全うしろと言われているのだ。

シナリオ書き換えの罅寄せを気にすることもない上に、魔法を駆使して目立ったことによって貴族とのあれやこれやに悩まされることもない。

なぜなら、この国の王族すら、本気になれば一掃してしまえる権力も財力も人徳も持った家柄の愛娘なのだから。

そうなれば、私のストッパーは、私を心配してくれる周りの人の思いやりだけ。

言ってしまうえば、私が楽しく健康にチート能力を使いまくるのであれば、誰もそれを阻むことなく笑顔で見守ってくれる環境なのだ。

結果、私は体調を心配する言葉など気にも留めず、ローゼバルト公爵家の当主である父の持つ広大な草原、伯爵領の領主（仮）となった。そうして領地改革（チート能力を思うがまま発動）へと旅立ったのが、五年前の十歳のときだった。

そして、十五歳になった私は、今まで散々放棄し、後回しにしてきた貴族の娘としての義務を果たす為に、与えられた領地から王都にある実家に帰省したのである。

実家に着くと、馬車に乗ったまま大きな門を抜けて、手入れされた庭園を進む。

今は春だから楽しめないけれど、初夏から夏にかけて、我が家にはお母様の好きな百合が咲き誇る。

お父様が莫大な投資をして草花の専門家を大量投入し、腕利きの庭師に整えられた、お母様——クリステア・フォン・ローゼバルトの庭園だ。

私が魔法で調整すれば、一年中百合を見られるとは思うけど、それは自然の摂理に反するから手を出さないことにしている。

すでに、この世界の色々な常識を壊している自覚はあるし、手を出さないでいいものはそのままが良い。

別に、花に興味がないわけではないよ？

一年中咲き誇る加護を貰った花がどうなるか知ってる？

庭師を雇う必要もないし、お菓子好きな妖精さん達がフワフワと飛び始めるんだよ。その妖精さん達がお花をお世話してくれるおかげか、花自体がキラキラと光り始めるんだよ。

私が先ほどまで過ごしていた領地の庭園は、その景色が日常だったからね。

立派な邸宅のローゼバルト公爵家。その玄関前で停止した馬車から降りると、玄関前から続く通路の両側にズラリと並んだ人の列。

ローゼバルト公爵家の使用人達だ。

「お帰りなさいませ。お嬢様」

年長の家令マイセンを筆頭に、使用人達が頭を下げて私の帰りを迎えてくれる。

「ただいま。お出迎えありがとうございます……いや、昨日もみんなと会ったけどね」

そう、私は移動ドアのおかげで五年の間、何度もここに帰って来ている。移動ドアというのは、私の魔法によって創り出した、通るだけで繋げた場所へ瞬間移動出来る便利なドアのことだ。

昨日も必要な荷物を実家の本邸に持ち帰っているから、実はここに来るのは昨日ぶりなのだ。

馬車も今日、王都に入る前に人気のない場所まで魔法で運び、ちよつと乗って来ただけ。

なんでこんなことをしたかつて？

王都に帰りましたよーって、周囲に向けたパフォーマンスの為。

私が魔法を使えるのはほぼ知られてはいるけど、流石に呼吸をするように自在に使えるとまでは知られていないので、力を隠すカモフラージュ的なね。

領地で魔法を使って色々やってはいたけど、近しい人以外は私が一人でやったなんて考えには至らないだろう。

なんせ、あのリアム・フォン・ローゼバルトなる人物がいますから。

私のお父様、ローゼバルト公爵がその発想力と資金力で興した事業を、愛娘の功にして娘の価値

を釣り上げているのだろう——というのが、周囲の大体の認識だそうだ。

おかげ様で、私は昨日まで自由気ままに領地で過ごすことが出来た。

そう、昨日までは……

「お帰り。リーゼ」

玄関前で待つていてくれたお父様とお母様にただいまのハグをする。

「お父様、お母様！ ただいま戻りました」

「これからまた一緒に暮らせて嬉しいわ」

「お母様、私もです！」

領地暮らしは自由で楽しかったけど、家族と一緒に過ごせるのも私は嬉しい。

十五歳になった私は、学園に通う為に王都に帰還したのである。それが後回しにしてきた貴族の娘としての義務だ。

私が今まで過ごしていた伯爵領はこの国で一番の観光地となり、生産業の方でも加工調味料や新鮮な野菜、ブランド肉を世に出している。

服飾、貴金属に化粧品や美容品もブランド化していて、ブランド名は「ローゼリア」。その名を冠した「ローゼリア商会」も立ち上げた。

商会の代表はもちろん私なのだけど、未成年である為、長男のヴィルお兄様が窓口、経営を手

伝ってくれている。

このことも、私がお飾りだという先の認識を手伝っているのだ。

次期公爵であるヴィルお兄様も妹を溺愛し、現公爵と共に未っ子の価値を上げているってね。

将来のことだけど、私が学園を卒業後、ローゼバルト商会は正式に私の商会となり、私の拠点は伯爵領地に移される。そのタイミングで、ヴィルお兄様がローゼバルト公爵の爵位を受け継いで王都に残り、お父様とお母様は離れた伯爵領地へと移り住む予定だ。

次男のエディお兄様は、光魔法が使えるようになってすぐに王宮から希少な魔法の使い手として発表された。治癒を得意とする光魔法の使い手として王宮に一室を貰い受け、医師として活躍しつつ、婚約者の第一王女殿下と愛を育み中だそう。

王女様との結婚と同時に侯爵籍を受け継ぎ、侯爵領地が拠点となるので、その際は王都への出勤用に、移動ドアを作って欲しいと頼まれている。

と、まあ五年間で色々あった。

そう、本当に色々……

ヴィルお兄様も、エディお兄様もローゼバルト公爵家の優秀な息子だ。

なら、私は？

《神の愛し子であり公爵家の宝珠》

それが私の一般的な認識らしい。

実際に私の働きを知っている人以外には、西の領地にいる以外の情報がない。

つまりは、ただ溺愛されている引きこもり扱いなのである。

この引きこもり扱いのおかげで、釣書が山ほど送られて来た。

家格がいくら上でも、引きこもりならば可能性があるのではないかと。

それこそ下は男爵家から上は王家まで。さらには、商会で財を築いただけの爵位を持っていない方々まで。

私自身はピンと来ていなかったけど、コレに激怒したのは、両親に二人の兄、それに元辺境伯爵エルジオ・メロディアス様と、お父様の旧友で、伯爵領の経営のサポートをしてくれているハリーおじ様だった。

一般的には、伯爵家以下に嫁ぐのであれば、政略結婚としてメリットが必要だし、恋愛結婚なら本人に任せられる。なのに伯爵家以下の人達から、釣書で求婚されるということは、会ったこともない人達から気軽にどう？ 結婚しない？ って言われているようなものらしい。

公女を娶るのだから、そんな簡単であっていいはずがない。

メリットも家格もない方々には、私を貶める行為であると、もう当の本人を置き去りに各方面へと抗議文を送ったそう。

「どうやって潰してあげようか」

それが、笑顔で放ったお父様のセリフだったそうで、陛下が非公式の場で宥めたそうだ。

「お前が言うとお洒落にならん！ 国が滅ぶかもしれない！ 頼むから怒りを抑えてくれ！」

と、陛下を真っ青にさせていたと、エディお兄様からのお手紙に書いてあった。

おかげで、私は婚約者も決まらず、一人身のままである。

これはまあ……ね。全然OKなだけけど。

婚約者については、学園で何かしらいい出会いがあれば……なんて思っている。けど、私が婚約者を決めないせいで、私との結婚を望む王太子殿下は、十九歳にもかかわらず婚約者がいない状態だとか……

王太子殿下に限らず、第二、三王子殿下、高位令息方もその状態であると言われれば、少し申し訳ない気持ちがあるのも否めない。

引きこもり扱いの私と婚約してでも、ローゼバルト家と縁を繋ぎたい家が多すぎる。

けど、あの陛下は変わらず愛し子の大ファンであらせられるし、まだまだ元気なので結婚はゆっくりで構わないと笑ってくれたのが救いだ。

## 眷属が人間離れしている件

そして、来月から通う学園の準備の為に、私の眷属も一緒に帰還した。

眷属というのは、主に対して揺るぎない忠誠を誓った者のこと。眷属になると、主の魔力を分け与えられ、魔力を得た者は、それぞれ魔法の才能が開花する。しかし、その誓約をした者は、命を終えるまで解除出来ず、私が命を落とすことがあれば道連れになるらしい。

まずアンナは、私の生き写しのような肖像画を削り出せて、おもてなしスキルが関係する魔法は全一流の専属侍女。小さな頃からお世話になっている、お団子ヘアのお姉さんだ。自分で言うのは照れてしまうけど、私のことが大好きで、私のことを何よりも一番に考えてくれて、とても信用出来る侍女である。

「お嬢様の姿絵をひと月ごとに、ご実家にお送りしております」

と、言われたのは、アンナが私の姿絵を安定して削り出せるようになった頃だった。

「せめて一年に一回にしようよ。ひと月じゃ代わり映えしないでしょう」

「何を仰っているんですか!? 髪が少し伸びています！ ちなみに私はお嬢様に頂いたメモ帳な

るものに、毎日のお嬢様の姿絵を保存してあります！」

ハリーおじ様の手伝いで必要になるかもと渡したメモ帳が、私のアルバムのようになっていて本気でドン引きした。

そんなアンナの、おもてなしスキルとは……

「お嬢様、紅茶が入りました」

「お嬢様、ベッドを整えております」

「お嬢様、湯浴みの準備が整いました」

魔法が使えなかったアンナが、魔法で湯を出し、ティーセットを並べ、シーツを毎日清潔に洗淨・乾燥させて、皺一つなくベッドを整えてくれる。お風呂の湯も適温で最高だ。

うん。私のお世話に特化したおもてなしスキル最高。

そして、探索能力で常に私の周りを探知し、警戒を怠らず、私の「空間魔法」や「ミニチュア魔法」にまでアクセス出来るようになった有能執事のセシル。家令マイセンの孫で私より六歳上の、サラサラの黒髪に灰色の瞳をした一見クールな美青年だ。初めて会ったのは五年前で、当時は幼さの残る美少年だったけど、今では大人っぽさを感じる二十一歳。「一見クールな」と言ったのは、私をからかって遊ぶのが好きだから。見た目に騙されてはいけません。

「お嬢様、もうすぐセルジオ様が屋敷にいらっしゃるようです」

など、事前に来客が分かるのも便利ではあるものの……

「お嬢様、体重が少し増えておりますね」

「なっ!? な、なんでそんなこと分かるのよ!?」

「探知能力によるものです」

なんて迷惑な能力なのか。

真面目な顔で主人の体重管理までしてくるなんて。

ちなみに、セシルの能力に関しては実際知らないことの方が多かつたりする。

私に見せる能力はそんな感じなんだけど、騎士団の人達からやたらと強いなんて言われている。でも、セシルが剣や武術の訓練をしているところなんて見たことないから、私の知らない力があってたりするのかもしれない。

セシルに聞いても、

「お嬢様の為に日々精進しております」

としか言わないのだ。

秘密主義者め！

次に伯爵領で出会ったカイン。元々は身寄りがなく、伯爵領で一人過ごしていた少年だ。最初は反抗的な態度だったんだけど、眷属となってからは従順に仕えてくれている。

彼は私の影に自分の姿を潜ませて、万が一のときはすぐに瞬間移動をすることが可能になった。影から影の移動も出来るかとセシルから説明されたけど、そんな場面がないからどんな感じなのかは分からない。

さらには、一流の暗器の使い手になったとも言える。

いや、暗器に影つて、そんな私は王家の人間じゃあるまいし、と口にした私に笑顔で圧をかけてきた、あの日のセシルを私は忘れない。

横でカインが私に、余計なこと言うな！と訴えかけてきたっけ。

「有事の際はよろしくね」

と、カインに伝えるのが精一杯だったなあ……

そして、リーゼ騎士団副団長になり、私の専属騎士の隊長でもあるブライアン。

彼は、収納空間を扱うことが出来るようになり、物を収納したり、瞬時に様々な武器を取り出せるようになった。

とは言っても、武器が必要な場面なんて私は遭遇したことなんてないから、領民の収穫物を運んだり、アンナに私の荷物を押し付けられたりしているブライアンしか見たことがなかった。

でも、騎士団で副団長を務め、慕われているのを見ると、きつと腕利きなんだろうなと思っっている。

他の騎士団員はというと、アレンは元々の身体能力がさらに強化された。足の裏が発達したのか、重力を操っているのか、本人は分かっていないそうだけど、壁も歩いて天井に逆さに立てるようになり、高所から飛び下りても平気になった。

「姫様ー！」

と、重力を無視して木の枝に逆さに立っているアレンに声を掛けられたときはビックリして、尻餅をついたのが懐かしい思い出だったりする。

セネリオは高火力・広範囲の風魔法が使えるようになり、さらには風の力を持つ妖精に好かれたおかげで、妖精の力を借りて盗聴も可能だとか……

いつか、女子会をすることがあれば、セネリオ以外を護衛にしようとか心に決めている。

アーサーは水魔法の使い手となって、セルジオ様の辺境領付近の『忘れられた森』で魔獣の大暴走が起きたときに、大洪水を起こして魔獣を森へ押し戻したりしていた。

たまに何度か『忘れられた森』から魔獣が来ていたりしたそうで、彼らは私の護衛時以外は森方面の警戒の為にグループに所属して活躍していた。

もちろん、大洪水のせいで荒れた大地は私が整備しに行きましたよ。

ジャミルは火の魔法剣士となり、剣に火を纏わせ魔獣を焼き尽くせるようになったけど、山火事を起こしかけて、消火したのも私だったりする。

アーサーの魔法で消そうとすると、大洪水になるからね……

でも、その高火力を買われてアーサーと共に警戒グループに所属して平和を守ってくれていた。ラウリは、元々犬の散歩が得意と言っていただけあって、敵意のない生き物と話せるのだとか。

自分だけ戦闘に役立たないと一時期は嘆いていたけど、意外と諜報や偵察に使えることが分かり、私の身を案じるセシルに重宝されていたりする。

「そのリスはなんと言っていますか？」

「お嬢様のおかげで、木の実が豊富になり過ごしやすくなったそうです」

「お嬢様は、豊穰の女神ということですか」

セシルとラウリのほのぼのとした会話を聞いてにんまりしたことがあったなあ。

と、この九人が私の眷属で腹心である。

そして、神様の遣いのフェンリル、シエルはなんと番を見つけて今ではお父さんだ。

シエルの奥さんは、『忘れられた森』の最深部からシエルの気配を辿り領地にやって来た。

シエルの気配を察し、様子を見に来た彼女は、シエルに一目惚れをした。そして、晴れてシエルを射止め、奥さんになり、伯爵領で共に過ごし始めた。

彼女にはノアールと名付けたんだけど、めちゃくちゃ綺麗な黒の毛並みなのだ。

シエルと並んでいると、白銀と漆黒って感じですがごく絵になる。

そのときの私は、アンナにシエル達の肖像画を出すよう頼んだのだけど、

「やはり、お嬢様しか絵に出来ません……」

顔だけ私になって、体がフェンリルの気持ち悪いキメラの絵が出来るなんてエピソードもあった。仕方ないので、その姿は私がチョコイと写真にしておいた。百号キャンバスほどの大きさのシ

エル達の写真は伯爵領にある、私の部屋に飾られている。

シエル達の子供は二匹いて、毛色は白銀と漆黒。

白銀が女の子でしらゆき、漆黒が男の子でくろがねと名付けた。

珍しい響きの名前を二匹とも、とても気に入ってくれている。

シエルとノアールは伯爵領地を守る為にも残ってもらい、しらゆきとくろがねは、私と一緒に王都の屋敷に来て初日から庭園をポテポテと走り回っている。

いずれはあんな凛々しくなるんだろうけど、ポテポテ駆け回る様子はもう可愛い子犬でしかない。

これは、動画に残すべき。

私はすぐに動画撮影の為の魔法を発動させたのでした。

## 学園準備

「お嬢様、学園の制服が届きましたよ」

王都に戻った初日、庭園で寝転びながらしらゆきとくろがねを撮影していたら、アンナから声が掛かった。

「今行くわ」

スツと立ち上がり、背筋を伸ばして令嬢モード発動。

「お嬢様、素晴らしい変わり身ですが、草まみれでございます」

セシルに笑顔で突っ込まれたので、魔法法を使って草を飛ばして再度令嬢モード発動。

「……草はなくなりましたが、髪が鳥の巣のようですね」

「くっ……」

セシルはいつも一言多いのよ！ アンナも口元がニヨニヨと緩んでいるわ。

五年経っても、私達は相変わらずです。

私は制服に着替える為に、屋敷の自分の部屋へと移動した。

「お嬢様、とてもお似合いです！」

アンナをはじめ、着替えを手伝ってくれた侍女達におだててもらい、いい気分の私。

制服は、ワンピースタイプの夏服に、秋冬はボレロを着る制服のデザインで、丈はもちろん長め。女性が足を晒すのは良しとされていなので、黒タイツに編み上げロングブーツで素足をカバーするようにになっている。

夏なのに、タイツとロングブーツかあ……ムレそう……

通気性・伸縮性がほとんどないタイツ。昔よくお世話になった、日本のストッキングを魔法で削ってしまおうかな……

「お嬢様、学園より手紙が届きました」

部屋に入ってきたセシルが持って来た手紙を確認すれば、新人生代表の挨拶を私に、という内容だった。

「新人生代表の挨拶って、代々試験一位の方がするものではないでしょうか？ 私は領地に行っていたから家庭教師からの推薦状で入学したはずなのに、なぜ？」

ちなみに私の家庭教師は、ハリーおじ様の妻、エミリーおば様。

「おそらくお嬢様の愛し子様としての立場へのお気遣いではないでしょうか？」

「嫌よ、そんなの。お父様にお願いで、公正な判断をして頂くようお願いしなくては駄目ね」

「では旦那様(だんな)にそのようにお伝えして参ります」



「ありがとう。よろしくね」

セシルが退室したので、制服を脱ぐことにした。

制服は侍女達が皺にならないように保管しつつ、気に入っている香水があれば香り付けもしてくれるらしい。

領地で、私専用にした香水を渡してお願しておいた。

それはそうと、セシルってば普段は余計なことばかり言うんだから、こういうときくらい私の制服姿を褒めてくれても良いのに。

《リーゼ！ もうくつついてもいいー？》

《いいー？》

しらゆきとくろがねが、そう言いながらポテポテと走ってくるので抱き上げた。

二匹同時だと少し重量はあるけど、魔法でこっそりと腕力を強化したので問題ない。

「来月から学園に行っている間、この子達と会えなくなつて寂しい」

犬の成長って早いよね。この子達もすぐに、お父さんのシエルみたいにちょっと偉そうになるのかな？ だとしたら、なんか嫌だなあ。

「お嬢様は寮には入れませんが、たった数時間ですよ。頑張つて耐えてくださいね」

アンナに言われて、はあいと返事をしておいた。

ソファに座り、しらゆきとくろがねも一緒に座らせると、アンナがすぐに紅茶を出してくれる。相変わらずのおもてなしスキルだわ。

一息ついたところで、ノックと共にお母様が来たと告げられて、中に入ってもらった。

「お母様、どうかされました？」

「リーゼにちよつと相談があるの」

向かいのソファに座ってもらい、お話を聞くと、明日の王妃様とお茶会にお兄様と婚約中の王女様も参加されて、二人はお揃いのドレスを着られるらしい。そこに急ではあるけど、私も参加して欲しいと速達が届いたとのことだった。

「王家の方が貴女を呼び出す為の口実とは分かっているのだけど……私もリーゼとお揃いのドレスで、ぜひ参加したいと思っているの」

と、眉尻を下げるお母様。

可愛いかな。

というか、もう帰宅がバレたとか早すぎる。

「王都に帰った報告もありますし、ぜひお揃いのドレスで参りましょう！」

私も、こんな可愛らしいお母様とお揃いのドレスを着たい！そして、可愛いお母様を自慢して回りたい。

「嬉しいわ、リーゼ。明日を楽しみにしているわね」

花が咲いたような笑顔でお母様が喜んでくれて、私も嬉しい。

「お母様、ドレスの用意は私に任せて頂いてもよろしいですか？」

「リーゼがデザインした物は素晴らしいもの！さらに楽しみが増えたわ」

「では、後ほどお届け致しますね」

お母様が上機嫌で部屋を出て行かれたので、早速ここで作業開始。

お母様のドレスは、エンパイアラインで膝辺りから下に向けてレースを上品に織り込んでいくデザインにして、薄紫から裾に向かって紫に変わるグラデーションに。

メインカラーの紫は、もちろんお父様の瞳の色だ。

レースにはお父様の髪の色で金刺繍を入れる。

——名付けて旦那様好き好きドレス。

私のドレスはお母様と同じデザインのものに、まだ十五歳だもの——可愛さアピールとしてバツスルを入れて膝からのレースの代わりに。さらに、腰に大きめのレースリボンを入れて裾までレースにしてみよう。

色はもちろんお母様と同じで、お父様とお兄様をモチーフに。

——名付けて、お父様&お兄様好き好きドレスである。

鼻歌を歌いながらデザイン画を描いていると、アンナがお母様と私サイズのトルソーを準備してくれている。

うん、出来る侍女だわ！

デザイン画を用意してイメージを固め、好みの生地とレースを用意して、魔法でトルソーに巻き付けると……綺麗に出来ましたー！

仕上げに、無限に収納出来る「空間魔法」からアメジストを出して、粉砕からの塗料に抽出。色をグラデーションにして「保存魔法」をかければ完成！

うん。完璧です。

「何度見ても素晴らしい魔法ですね。お嬢様のセンスも素敵ですし」

アンナがドレスに見惚れながら褒めてくれる。

「本当に、魔法って便利よね」

「このように扱えるのはお嬢様だけでしょうけどね」

「だから普段はちゃんと職人にお願ひしてるわ。人を雇用してお金を落とすのが大事ですもの。今回は急だったからズルをしちゃったけど」

「そのお考えだからこそ、伯爵領地があんなにも栄えたのでしょうね」

「お父様達からの教えのおかげよ。私一人だったらあんなにも上手く回せないわ」

「お嬢様が人格者だから周りにも恵まれるのですよ」

「アンナって私鬣肩が過ぎるわ」

「私にとっては世界一のお嬢様ですから」

ふふっと笑い合う。手の空いている侍女達を呼び、お母様にドレスを届けてもらった。そのときにもドレスを褒めてもらえて大満足。

そこで再びノックの音。

今はセシルがお父様へ学園の対応についてお手紙を出してもらう為にマイセンの元へ行っているので、お母様のときと同様アンナが扉を開けてくれた。ちなみに今日はラウリが護衛役だ。

来訪者は、私の影であるカインだった。

「お嬢。明日、城のお茶会に参加するって影から伝わったから、セネリオにも情報収集のために妖精を飛ばしてもらったら、案の定王太子も来るみたいだぜ……っと、だからその刺繍が金なのはやめといった方がいい。紫に金とくりゃ、自分の色だと勘違いして当主を飛び越えて来そうだぜ、あの王太子」

「カイン！……そうなのね。そうなったら面倒だわ……でも、あの方はそんなにナルシストだったかしら？でも変な誤解はされないに越したことはないわね」

カインってば私の影を通して現れることも出来るのに、ちゃんと扉をノックしてくるなんて。以

前からは考えられないくらいに成長だわ。

きつと、セシルとシエルに凄く扱かれたんだろうな……ご愁傷様です。

それはそうと、ドレスの色はどうしようかな？

うーんと考えていると、ふとカインと目が合った。

「あら？ カインの瞳、そんなに黒かったかしら？」

夜を閉じ込めたような黒い瞳の中に光が入ると、凄く映える。

「あー、影の能力使い出してからこうなった。閨属性の証みたいなものだっつてよ。犬……じゃねーや、シエル……様が言ってた」

すごく嫌そうな顔だ。不本意だけど、シエルに逆らえない感じが見て取れる。

「へえー」

「……んだよ」

覗き込むように近寄れば、眉間に皺を寄せて睨んでくるカイン。

「私の刺繍の色は黒にするわ。それなら勘違いもされないでしょう」

「変に勘繰られそうですけどね」

アンナがクスクス笑うけど、何か変かしら？

「それならそれで構わないわ。王太子殿下の色だと思われる方が色々と困るし」

「良かったわねえ？ カイン。お嬢様は黒になさるそうよ？」

アンナが言うのと、

「ハッ。俺には関係ないだろ。誤解されなきゃいい話なんだからよ」

そうだ、勝手に使うのは良くないかも。

「了承を取った方がいい？ カインの瞳の色を頂くけど良いかしら？」

「はあ!? バッ……普通に黒にするで良いだろうが！ いちいち変な言い方すんじゃないわねえ！」

腕で顔を隠しながら、カインが早口で声を荒らげると、

「おい！ それ以上の物言いは護衛騎士として見逃せんぞ」

私とカインの間に身体を滑り込ませてきたラウリが、彼と数秒睨み合う。

しばらく睨み合った後、カインはスッと消えた。

影に入っただけの影へと移動して行ったのかな？

すぐに王太子殿下のことを調べて来たり、こうやって庇ってくれたり、私の周りの人達は本当に優秀だわ。

## 王家のお茶会

お茶会の当日、王城に着くとお父様が待っていて、お茶会前に陛下と謁見の時間が取つてであると伝えられた。

……一令嬢が陛下に謁見なんてするものなのか甚だ疑問ではあるけど、言われた通りにまずは謁見の間へ向かう。

「リーゼロッテ嬢！」

抱きしめんとばかりに私に向かって玉座から下り、笑顔で駆け寄るのは、この国の主、間違いない國王陛下であるのだが。

……いいのかな？

いや、いいわけではない。

「陛下、お久しぶりでございます」

万が一にも抱きしめられたりしないように先制攻撃、優雅なカーテシー発動だ。

「う、うむ。顔を見せてくれるのを待っておったぞ」

その甲斐あつてか、寸前で勢いが減退した陛下。

非公式の場であれば、言つてしまえば親戚の叔父さんだしハグくらいは……いや、やっぱり想像したらちよつと嫌かも。

「本日は、王妃殿下のお茶会に母と共にお邪魔する機会を頂きまして、先にご挨拶をと馳せ参じました」

「そのようだな。私も一緒に行こう」

「……はい？」

「さあ、王妃も待っているだろう。一緒に行こう」

聞き直したのに二回言つたよこの人。

「陛下はご公務がおありでは……？」

「リーゼロッテ嬢より優先すべきことがあるか？ 余にはない！」

いや、あるだろう！

そう口に出さなかったことを褒めてもらいたい。

お父様も頭を抱えてないで、注意してよ。

今この場にいる人達は、陛下が信頼し、陛下のことをよく分かっている人だけだとしても、そんなハッキリ言っちゃ駄目でしょうに……

隣を見れば、流石のお母様は淑女の微笑みで受け流しているけど……あ、口元がヒクヒク痙攣している。

私はどうすれば良いのか分かんないから、もう流れに身を任せることにします。

「今日の会場は温室と言っておったな」

お茶会が行われる会場へ向かって、ウキウキと弾んだ声で前を歩く陛下。

まあ、そんなに喜んでくれて嬉しいですけどね？

でも公務が疎かになるなら、王城に来ない方が良いかなって思っちゃうよね。

温室の扉を陛下が自ら開けてくれたので、申し訳なく思いながら中へ入る。

「リーゼロッテ嬢！ 前に見たときも美しかったが、さらに美しくなったな！ 今日 এস코ートを受けてくれるね？」

足早にやって来たのは、この国の王太子である第一王子。

「ご無沙汰しております。王太子殿下に এসコート頂けるなんて光栄ですわ」

余所行きスマイルとは裏腹に、一人で歩けるけどな！ と、心の中で叫んでおいた。

「私の方こそ、こんな美の女神を এসコート出来るなんて光栄だよ」

うっとり見つめてくる王太子殿下に、見た目ばかりやないかい！ と、また心の中で叫んでし

まう。

お茶会のテーブルには、すでに五人が座っており、隣り合った二つの空席が私とお母様の席なのだろう。

陛下の姿を確認した従者がすぐに椅子を持って来たので、陛下が来ると薄々予想されていたのかもしれない。

そして、陛下から右回りに王妃殿下、王女殿下、エディお兄様、お母様、私、王太子殿下、第二王子殿下、第三王子殿下の席順となった。

私としては、第二、第三王子殿下はもちろん、エディお兄様の参加も知らなかったので心の叫びがやまない状態ではあるけど。

なんで、王家勢揃いなのに！ と。

王女殿下、第二王子殿下、第三王子殿下と、初めましてのお三方を紹介頂き、お母様によって私も紹介を受けたので当たり障りのない挨拶をしておいた。

「リーゼロッテ嬢は私の将来の妹ですもの！ ぜひ仲良くして頂きたいわ」

と、エディお兄様の婚約者である、エミリア王女殿下の言葉を皮切りに三人の王子に質問攻めに遭い、うんざりしながらも淑女の微笑みは絶やしません。

もうこうなったらばばヤケクソ状態ではあるけども、貴族のマナーはお母様という素晴らしい淑

女に教わってますもの。

「リーゼロッテ嬢は、レオンハルトと同年だから、来月学園に入学するだろう？ 私が生徒会長を務めるので、ぜひ二人には生徒会の手伝いを頼みたいのだが」

と、アーロン第二王子殿下とレオンハルト第三殿下、二人に生徒会に誘われたのだけ……

私リーゼロッテは、放課後の時間は、しらゆきとくろがねの成長を見守り、伯爵領地の報告確認をしなければならぬので、そんな時間はない。

かと言って、伯爵領地のことに私が関与しているとは知られていないだろうし、どうやって断ろう……と、悩んでいるとお母様から助け舟が出された。

「リーゼも十五歳になったので、王家の皆様には打ち明けますが、この五年の間における伯爵領地の発展は、この子の手腕によるものなのです。様々な観光業に生産業、その全てですわ。本日のこのドレスもリーゼのお手製ですの。ですから、放課後は領地の管理がありますので、真つすぐ帰宅することになりますと思います」

お母様がぶっちゃけてくれたおかげで、王家の面々は目を見開いたまま固まっているけど、一番最初に受け入れたのは王妃殿下だった。

「その素敵なドレスがリーゼロッテ嬢の？ 後で同じ物が欲しいのでお聞きしようと思っていたのよ。伯爵領で作られたドレスはたくさん買ったのだけど、それならあのドレス類も……？」

やはり女性は経営よりもドレスの方が気になるのね。

それなら……

「お母様、王妃殿下にドレスをお作りしても構いませんか？」

「ええ。同じようなドレスで少しアレンジできる物がいいかもしれないわ」

丸つきり同じだと、王妃殿下がお母様の真似まねをしたことになってしまふもんね。逆は良いけど、王妃殿下が真似るのは立場上良くないと、私にも分かる。

「では、王妃殿下のはマーメイドラインに致しましょう」

その場でトルソーを出し、自分達のドレスを作ったときと同じように創り上げていく。色は紫が王家の色なので、同じ色合いで問題ない。

「王妃殿下のサイズが詳しく分からないものですから、調整できるように仕立てておきました」

王宮勤めの侍女ならすぐに調整できるだろうし。トルソーを下からレースで包み、首元で真つ赤なりボンを結んでラッピングを模した形にして、どうぞと告げると、なぜか巻き起こる拍手。

「素晴らしいわ!! こんな素敵なドレスを一瞬で!」

「愛し子様の魔法を目の前で拝見できるとは!」

王妃殿下と陛下は興奮して、陛下なんて愛し子様呼びに戻っている。

「エドの妹君は、本当に神に愛されているのね」

「私が今こうしてリアと過ごせるのもリーゼのおかげさ」

王女殿下とエディお兄様は二人だけの愛称呼びで、なぜか二人の世界に……仲がよろしくて良いことだ。

「リーゼロツテ嬢。やはり、貴女は国母になる為に生まれたのではないだろうか？ ぜひ、私との婚約を前向きに考えてはくれないだろうか？」

「兄上、彼女の力が大々的に知られてしまえば、国中がその力に頼ろうと甘えが出て来てしまいま<sup>し</sup>す。臣下<sup>しんか</sup>として一番身近で兄上を支える私こそが、リーゼロツテ嬢と婚約を結ぶべきではないかと思いませんが」

「兄上方、リーゼロツテ嬢は領地の発展に貢献されたのですよ？ それならば私と共に領地を治め、国を豊かにした方がずっと国益に繋がると思っています」

王子殿下達三人は、あーだこーだと私の気持ちを無視して誰が相<sup>ふさ</sup>応<sup>さわ</sup>しいかと話し出した。私はお母様にこっそり耳打ちする。

「お母様、そろそろ帰りたいです」

「そうね、旦那様に言われた通りにリーゼのことを明かしたのだけど、想像以上の反応だわ」

陛下と王妃殿下に失礼すると告げれば、馬車まで送ると言われた。

ここで見送りを断っても結局押し切られてしまうので、素直に受け入れて、馬車に乗るまで王家

総出で見送って頂いた。

「お母様……私、疲れました」

「ええ、私も疲れたわ」

馬車に乗り込み、母娘でふうとため息をついたのでした。

## 婚約者

「リーゼの婚約者を選ぶ必要があるかもしれない」

城から帰宅して、部屋でひと息ついたところ、お父様の第一声がこれである。

「アナタの言う通り、伯爵領地のことを話したのだけど、逆効果だったのかしら？」  
困り顔のお母様。

「いや、そのおかげで陛下と王妃殿下は、王子達との婚約については、結ぶべきではないとお考えだ。貴族の世界なんて、私利私欲の為にリーゼの力を利用したがる有象無象の宝庫と言っても良い場所だからね」

「それならなぜ、婚約者を急ぐ必要が？」

お母様と同意見だわ。

「いや、王子達がね……リーゼの取り合いのようになってね……陛下の意見を置いてきぼりにして、有象無象から守る為にも国母にした方が良く、そしてリーゼが国母であるべきだと言うなら、玉座争いも視野に入れると言い出したんだ」

「それは……下手すると、リーゼが傾国の悪女になってしまいますわ」

「そんなの嫌ですわ！」

傾国の悪女!?

冗談じゃないよー！

そんな争いしようとしてしないで頂きたい！

「王妃殿下も頭を抱えてしまつてね。陛下なんかは、リーゼが義娘になる誘惑に勝てずに、少し押しなされ気味だそうさ。だから、仮でも構わないから婚約者がいるということにした方が良いんじゃないかと思つてね」

「でも、婚約者を決める場を設けてもしたら、それこそ取捨つかなくなりそうさわ」

「そこが悩みどころではあるね」

「リーゼは社交の場にも出ていないから、この子自身が良く思っている方もいないでしょうしね」  
そんなのよね。領地にもつてたから、どんな人がいるかも分からないのが現状なのだ。

身近な男性といたら、セシル、カインに護衛騎士達しかいない……ん？

あ、そうか！

「お父様、セシルはどうですか？」

「はい……!? 失礼しました」

私の提案に、マイセンが聞いたことない大声を出したので、私の肩がビクツとなった。

そりゃあ、仕えている家の娘が孫を婚約者に指名したらビックリするか。

セシルを盗み見れば、当の本人はいつもと変わらない笑顔だけだ。

「セシルはどうかかな？ 飯とはいえ、リーゼとの婚約をどう思う？ もちろん、君が好いている女性が他にいるのなら断つてくれて構わないよ。誤解されて君の恋路を邪魔するわけにはいかないしね」

お父様が尋ねると、

「僭越ながらお答え致しますと、これまでの五年間、お嬢様のことだけを考えて生きて参りましたので、婚約者の件は個人としては光栄でございます。が、身分の低い私などと婚約を結ばれてはお嬢様の名に傷が付くのではと考えます」

右手を胸に当て、笑顔で綺麗に一礼をして見せたセシル。

これは上手く理由を付けて断られたってことかしら？

「ふむ。今は執事の肩書きも公爵家当主というのも忘れて、一人の男として、リーゼロッテの父親に向けて答えてくれないかい？」

お父様の言葉にスツと身体を起こして、真剣な顔になるセシル。

「リーゼロッテ様が私をと望んで下さるならこれ以上の幸せはありません。何があろうとリーゼ

ロッテ様をお守りする覚悟はすでに五年前よりしております」

……え？

私の顔がボンツと発熱したかのように熱を帯びるのが分かった。

え、待って？

もしかして、セシルって私のことが好きなの？

もうセシルの顔が見れないんだけど!!

「……リーゼは、最初に君の名前を出すくらいだ。少なからず好ましくは思っているのだろう。マイセン、どうだ？ 孫と我が娘の婚約はどう思う？」

「飯と申されておりましたし、お嬢様が学園で良き出会いがあればすぐに解消をし、以後変わらぬお任せ出来るというなら構いません。祖父としては見守る心積もりでございます」

「もちろん、解消に至ればそのように。ですが……」

マイセンに答えつつ、セシルがこつちを向いたのが分かるけど、赤いだろう自分の顔を見られたくなくて目を合わせられない。

「私の気持ちに報われる奇跡はありえないと思っておりましたが、軽い気持ちで私の名前を出したこと、まずは後悔して頂きましょうか。あとは、他の男など目にも入らぬほどに愛して追い詰めて差し上げますね」

ニツコリと効果音を付けたような笑顔で私を見ているセシルに何とか言い返そうと、軽く睨む。「い、言い方!! 追い詰めるとか物騒ぶつそうすぎますわ!!」

「では、溶かして差し上げます」

「そ、それも言い方!!」

「お嬢様は相変わかわらず我儘ままたまですわね」

「な、貴方、本当に私が好きなのかしら!？」

「好きなど生温なまぬるい。愛しておりますが」

「あ、あ、あう……」

セシルに追い詰められて、お望み通りすでに後悔しているわ! 大体、いつも憎まれ口ばかり叩いていたくせに! 好きな子イジめる小学生かつ!! 小学生なのか!?

「ちなみに」

「な、なによ!」

「学園の制服は大変お似合いで、有象無象がその姿を目にするのは腹立たしく思っております。それゆえに、お似合いだとお伝えするのが遅くなってしまうました」

「な、な、なによ、今更!!」

「侍女達が褒めておりましたし、私がお伝えせずとも充分かと思っておりますが」

「そ、それでも褒めてくれたって良いじゃない!!」  
「本当に可愛い人ですわね」  
「もう無理ー!!」  
耐え切れなくなった私は部屋を飛び出したのだった。ドア越しにお父様とマイセンの会話が聞こえる。

「マイセン……君の孫はなんと言うか、怖いね。色んな意味で」

「誠に申し訳ございません。教育を間違ったようです」

「いやまあ……リーゼにはピッタリの相手かもしれないね」

「お嬢様は、甘え下手であるのに甘えたいお方ですので、孫の直球さはお役に立てるかもしれません。……しかもあやつ五年としれつと言いましたが、お嬢様が生まれたときからお慕したいしておりますからね。相当拗こじらせているかもしれません」

「……見守ろうじゃないか。本人も言っていたが、身分に関しては陛下とも相談してみるとするよ」

「承知致しました。よろしくお願ひ致します」

……とりあえず、セシルが仮婚約者になりました。

仮です、仮!! 仮だもん!

屋敷から馬車で十分ほど揺られて到着したのは、私が今日から通うことになる学園。

門前に馬車を横付けする為、この待ち時間の方が登校時間より長い気がするのはいかゞうか？

もう三分ほどで着くから歩く、と言えばアンナに猛反対された。

「公爵家のお嬢様が歩くなど許されません」

こういうところは相変わらず面倒でしかないんだけどなあ……

やっと私の馬車が門前に辿り着いてドアが開くと、一緒に乗っていたセシルが先に降りて私を馬車からエスコートしてくれ、その後ろをアンナが私のカバンを持って降りて来た。

学園内では、侍女を一人伴うことが出来るので、私の専属侍女であるアンナを伴って登校することになる。

セシル？

セシルは、ほ、ほら、私の仮婚約者だからエスコート役よ。

「では、リーゼ。気を付けて」

……まだ慣れないわ！ セシルにそう言われて引き攣った笑顔で手を振り、別れて門を潜る。

一か月ほど前に私の仮婚約者の話が出た後、お父様の手配によりセシルはセルジオ様の養子となった。

つまり、セシルの身分は辺境伯家の三男となって、身分的に釣り合うようになった為、速やかに私との婚約の準備が整った形になった。

セルジオ様は、それはそれは喜んで、お得意の休憩なし超特急の早馬で王都の公爵邸までやって来たのが、つい先日のことだ。

セルジオ様は、伯爵領にいるときからセシルとよく一緒に行動していたこともあり、セシルを気に入っていて、元々養子にして私と婚約させられないかと考えていたらしい。

優秀な義息子に愛し子の義娘、さらには義娘の実家はあのローゼバルト公爵家である。

万々歳だ！ と、セルジオ様はお父様とセシルと朝まで宴会をしていたおかげで、お父様が二日酔いになり私に助けを求めてきた。なのにセルジオ様とセシルはいつも通りだった。それを見たお父様は、セシルに対して末恐ろしいと言っていた。

セシルは次々と注がれるお酒を笑顔で飲み干していたらしいが、お父様は目撃したそうだ。

早業で空間魔法を発動し、お酒をお水に変えていたんだとか。

お父様に言われて、共有されている収納空間を確認すれば、確かに大量の酒樽さかだるが収まっていた。あの量を付き合わされたお父様は、二日酔いで済んで良かったレベルである。

そして、飄々ヒョウヒョウと魔法を使いながらセルジオ様を相手していたセルシルの評価がお父様の中で「未恐ろしい」になったそうだ。

セルシルに聞けば、伯爵領でもセルジオ様のお酒の量がとんでもない量だったので、事前に収納空間に樽を用意して入れておき、お酒を樽の中に入れ、その分の水を取り出していたのだとか。

どうやら、収納空間の中では収納時と物質の状態が変わらないそうで、樽の中の水とアルコールが混ざることがないそうだ。

私が知らないことまで知っているセルシルは確かに恐ろしいかもしれない。

私の魔法なのに……と、まあ、そんな感じで一応、仮だけど、正式な婚約者になりました。

そんなセルシルは、私が学園に行ってる間、ヴィルお兄様について領地経営などを学ぶことになった。

私が学園で本物(?)の婚約者を見つけなければ、セルシルとそのまま結婚になるからだ。

もし、見つけてセルシルとの婚約が白紙になった場合、家令として召し上げられることも決まっているので、領地経営の勉強も無駄にはならないらしい。

いやさ？

一応婚約者なんだし、家に帰れば執事としても傍にいろわけでしょ？

それで本物の婚約者って見つかる？

そんなの浮気でしょ？

なんでみんな普通にその状態を受け入れてるのか、私には理解が及ばないのだが。

なんて考えてたら教室に着いていたようで、アンナから声を掛けられた。

「では、お嬢様。お昼まで待機室におりますので何かあればお呼び下さいね」

「ありがとう、アンナ」

カバンを受け取り、教室のドアを開けると一斉に視線を感じる。

そう言えば私、社交界デビュー、デビュタントもまだだし、領地に引きこもってたし知り合いどころか見たことある人もいないんだけど。

名乗った方がいい？

いや、どうせ自己紹介とかあるだろうし、教室に入っすぐ名乗る文化は私の辞書にはないのでそのまま空いていそうな席に座ろう。

見渡せば、廊下側の後ろの方には誰もいないみたい。

教師にアピールしやすいよう、貴族は前列を好むってハリーおじ様に聞いたなあ……

でも、ハリーおじ様もお父様もお母様も後ろの方の席だったらしいし。

よし、そこにしようっと。

椅子を引いて座り、カバンから暇つぶしに持って来た小説を開くと、数人の足音が近付いて来るのを感じた。

「貴女、見たことのない顔だけれども！ スリンガー侯爵家のオーガスタ様にご挨拶をしないなんてどういうことなの!？」

その声に、ゆっくり顔を上げてみると、女性が三人。

真ん中の人は、腕を組んで胸を張りながら、顎をツンと上に向けて私を見下ろしている。

顔を上げた私と目が合った左側の女性は、ハッとした顔をして一緒に来た二人に向かって何か言いたそうにオロオロ出した。

……ちよつとめんどくさいなあ。

残念ながら、私は気弱なタイプではないので権力で来るなら迎え撃ちますけど？

「あら？ ご挨拶ですか？ 私もそちらの方にもらった覚えが御座いませんが？」

彼女達の顔をしっかりと見れば、真ん中の女性は、一瞬目を吊り上げたもののハッとした顔をして分かりやすいほどに顔を悪くした。

そうだよね。

私を見たことがなくても分かるはず。

私の紫色の瞳は王家の色だもん。

王家以外に紫色を持つのは、ローゼバルト公爵家だけだと、普通の貴族なら知ってて当たり前なのだ。

まして、侯爵家という高位貴族なら尚更だ。

尊大な態度を取っていたスリンガー侯爵家の令嬢は、雲行きが怪しいと思ったのか私の顔を覗き込むようにした後、震えながら後退りをした。

「あ、あの、公女様とは知らずに申し訳ございませんでした……どうか、どうかご容赦下さいませ」

そんなに怯えられたら、私が悪者みたいじゃないか。

やり返そうとは思ったけど、別に自分から絡むつもりなんてないのに。

「私の方こそ社交を行っていないのだから、知られていなくても当然だわ。でも、誰彼構わずそのような態度を取るのはいかがなものかしら？」

首をコテンと倒して軽く注意だけはしておこう。

「申し訳ございませんっ」

三人が頭を下げるのでこれで終わり。

気にしてないと伝えて彼女達に離れてもらうことにした。

「言い返さなければ侮られ、強く言い返しすぎれば傲慢だと言われてしまうからね」と、登校前にヴィルお兄様に言われたのだけど、ああ本当に面倒だ。

「ローゼバルト公爵令嬢。大変で御座いましたね」

一連の流れを見ていたのか、青みがかった銀髪の女性が話しかけてきた。

緩やかに波打つ銀髪。

綺麗だわ！ 私の髪はこれでもかかってくらいのレストランだから、ちょっと羨ましいぞ。

瞳は若草色で優しそう。

「ええ。初日だし、私の顔は知られていませんもの、仕方ないですわ。貴女は？」

「名乗らず失礼致しました。私は、マライア・カイエンと申します。どうぞよろしくお願い致します」

カイエンの姓なら伯爵家かな。

貴族の家名や特産品は、しつかり家庭教師に習ったからバッチリだ！

「改めまして、リーゼロッテ・フォン・ローゼバルトですわ。リーゼロッテと呼んで下さいね。カイエン伯爵領の真珠はとても美しいですよね」

「リーゼロッテ様、私もマライアとお呼び下さい。当家の産品をご存知だなんて、父も喜びますわ！」

少女のような笑顔で一步近づいて来たマライア様に、私も笑顔で対応をする。

「マライア様は、領地事情に詳しいのかしら？」

「はい。一人娘ですので跡継ぎとなるべく、領地経営を父に習っております」

カイエン産の真珠で色々作れたら、ローゼリアの商品の幅も増えて良いかもしれない。この世界の女性はキラキラした宝石も上品な真珠も大好きなのだ。

「マライア様、良ければお昼休みのお時間を私に頂けませんか？」

「喜んで一緒に過ごさせて頂きます」

にっこり笑いながらも、私の人となりを窺っている感じがするマライア様。

この人、きつと賢くて話が出るタイプだわ！

真珠はアクセサリーとしてももちろん、ドレスに直接装飾しても綺麗だし、美容品にも使われる素晴らしい物だもん。

ぜひ、色々融通してもらいたいところだ。

こちらからも何かを出せるといいのだけど、マライア様とはそんな話し合いをしたいわ!!

お昼休みに話したいことをノートに書き出していたせいで、教師が来たことにも気付かなくて少し恥ずかしい思いをしたのは秘密にしておこう。

「一年A組、このクラスを受け持ちます。カサンドラ・ドブルと申します」